

---

# ひとつこと、ふたこと（一人でいること、二人でいること）

白草

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ひとこと、ふたこと（一人でいること、二人でいること）

### 【Zコード】

Z0211R

### 【作者名】

白草

### 【あらすじ】

一人でいるってどういうことだろう。一人でいるってどういうことだろう。誰かといふるってどういうことだろう。特別なことなんてなんにもない、ありふれた日常。大学の前期日程が終了し、夏休みに入り、特に何かに打ち込むこともなく、なんとなく日々を過ごしていった。だけどそうじゃなかつた。実家に帰るんだつた。風景を見て、思い出に触れる。記憶を、追う。忘れてきたもの、落としてきたもの、置いてきたもの。それをわたしは語ろうと思つ。一人でいること、一人でいること。思いを馳せよう。あなたはどう思ひます

か  
?

久しぶりだな、と誰かが言った。

カフェテリアのオープンテラス席でブレンンドコーヒーを飲みながら、わたしはキリマンジャロとかブラジルとかグアテマラとかいう土地のことを考えていた。プライドをズタズタにされた土地のことを。

だけど誰かが言うの。調子はどうだ、って。

尋ねる声が頭の中に流れ込んで来て、コーヒー豆のこと、土地のことを脇へと押しやる。そもそも豆に関しては、暇を持て余した店員が勝手に説明しただけ。今重要なのは、声。だからわたしは耳を澄ます。

カフェテリアの中、ではない。店内にお客がいない。寒すぎるんだ。きっと冷房の設定を間違えている。長袖の制服の店員たちが時々腕をさすっているのに、店内の状態は改善されない。少なくとも三日、店員さんたちは腕をさすり続けている。

……ということは。声の主はカフェテリアの外、ガラスで区切られたこちら側にいる。一人で本を読んでいる人、何か話しているのか笑顔の三人組、ノートパソコンに向かうスーツ姿の人、手を握り合っているカップル。傘のような庇が取り付けられた五脚のテーブルにわたしを含めた八人の人がいて、声は聞こえてくるけど不明瞭で。ついさっきまでコーヒー豆とその産地について考えていたわたしの耳は、道路を走る車の音だけを正確に捉えていた。カフェテリアとその外、境界線を示すかのように作られた花壇の向こうで、何台もの車がどこかを目指して走っている。けれど歩道を歩く人はいない。

幻聴だった。そういうことなのかもしれない。わたしは少し温くなってしまったコーヒーに口を付けて、プライドをズタズタにされたコーヒー豆の憂鬱について考え始める。

例えば、「ブラジル豆百パーセント使用の「コーヒー」について。「コーヒー豆にランクがあることをわたしは知っていた。ついさっき店員さんから教えられた。無理矢理。だから考える。「ブラジル豆を百パーセント使つていたとしても、「ブレンンドコーヒー」と呼ばれてしまう可能性について。正直よく分からない。

だから、「君はどう思う」つてわたしは聞いた。「オープントラスにいる七人の知らない人に、じゃなくて、わたしがいるテーブルの上に座つた真白な猫に。

知らない、と猫は答えた。

「知つてたらおかしいよね」

それより調子はどうなんだ、と猫が言つ。

「中の中かな」とわたしは言つて、誰かが誰なのか気付いた。白猫の声だ、つて氣付いた。だから、「久しぶりだね」つて。

十日ぶりだな、と猫は言つ。

ちょっと歩かないか、と猫が言つた。

俺は純血種なんだ、と猫が言つた。

カフェテリアの敷地から出て、わたしたちは目的地も決めずに歩き始めた。曲がり角を見つける度に正解のない問題を解くような気分で、次は？ 左、次は？ 右、という感じに問い合わせを積み重ねて。何個目かの交差点で信号待ちをしていると、思い出したように猫が言つた。俺は純血種なんだ、と。

わたしは猫の言いたいことがよく分からなかつた。純血種ってなんだろう、と思った。「ブラジル豆百パーセント使用の「ブレンンドコーヒー」と何か関係があつたのかもしね。でも聞かなかつた。聞いて欲しそうな顔をしてわたしを見上げていたから。わたしは聞かない。本当はどういうことかすごく気になるのに、気にならないよ、つて感じに取り繕つて。街を歩いて、今はなかなか色の変わらない歩行者用の信号機に目を向けている。

目の前にあるのは一車線の道路で、道幅はそれほど広くなかった。

中央線が実線じゃないから、道幅が十一メートル以下の道路。十字路でも丁字路でもなくただ真直ぐ伸びているだけの道。向こう側に渡りたいね、とわたしたちは話していたのだけれど、横断歩道は現れなかつた。やつと見つけた横断歩道で信号が変わるのを待つていると、やっぱりわたしに聞いて欲しいのか、俺は純血種なんだ、と猫が言つた。

「血統書付きなんだ」とわたしは言つ。いつまでも焦らしていたらかわいそうだし。それに、信号、なかなか変わらないし。時間を持って余していただから。仕方なく。

目の前を一台の軽トラックが通つた。後続車はない。

血統書つてなんだ、と猫が言つ。不思議そうな声で。

「血統書は純血種の証明書なんだよ」

じゃあ君も血統書付きなのか、と猫。車のクラクションがどこかで鳴つた。

「そうかもしけないね」

でも、と猫が言つ。血統書つて誰が誰のために作ったんだろう。猫の血統書は人が人のために作ったものだ。ヒマラヤン、ペルシヤ、ロシアンブルー。他にも猫の種類はあるけれど、すべては人のために作られたもの。わたしには関係のないもの。じゃあ、人間の血統書はどうだろう。あつても不思議じやないと思う。ただ、それが誰のためのもので、誰が作るのかは分からぬけれど。もしかしたら、人ではないものの証明書もあるのかもしけない、なんて。分からぬのか、と猫が言つた。残念そうな、落ち込んだような声で。

「人間つてさ、色々と複雑で難しい生き物なんだよ」

わたしはいつどこで聞いたのかも分からぬ言葉を猫に伝えた。

何の解決にもならない、わたしのものではない言葉を、会話の間を埋めるためだけに告げた。人間は色々と複雑で難しい、と、わたしに言つたのはお爺ちゃんだと思つただけれど、正直よく覚えていない。ああ。そういえばお爺ちゃんと最後に会つたのはいつだつたろ

う。わたしは覚えていない。お爺ちゃんがどういう顔をしていたのか。髪は生えていたのか。生えていたら、サンタさんみたいな髪なのか、そうじゃないのか。背中は曲がっていたのか、そうじゃないのか。ブランドものの服を着ていたのか、そうじゃないのか。お金持ちなのが、そうじゃないのか。わたしは何も覚えていない。思い出そうとしても、思い出せなかつた。

それは、つまりどううことだ、と猫が言つ。

「それはつまり、よく分からないうつてことだよ」

血統書つてやつも、色々と複雑で難しいんだな、と猫が言つた。信号はまだ変わらない。わたしたちを道のあちら側に渡らせてはくれない。いつまで待たせるつもりなんだろう。

田の前を、さつき通つたのと同じ軽トラックが通つた。けれど方向は逆。通つたばかりの道を戻つていく。と思つたら、横断歩道を過ぎて少しのところで止まつた。

「君は純血種なんだよね」とわたしは猫に視線を戻して。

「そうだ、俺は純血種だ、と猫はトラックに田を向げずに。」

「じゃあ、血統書は誰が持つているの

俺自身が血統書だ、と猫は言つた。

その意味を、わたしが問うことはなかつた。軽トラックを降りた男の人気が、わたしに手を振つている。口を開いて何かを言つていた。<sup>離</sup>と。わたしに向かつて言う。

わたしのことなのだろうか。もしかしたら白猫のことなのかもしれない。

そういうえば、わたしの名前はなんだつたらう。今この瞬間まで、必要だとは思わなかつたもの。記号<sup>離</sup>? それがわたしの。

「おお、離。こんな所にいたのか。待ち合わせ場所にいないから心配したじゃないか」

しわがれて、どこか演技めいた低い声。わたしはこの声を知つているような気がする。

「待ち合わせ、つて」なんだろう。

男の人がわたしの目の前まで歩いて来て、足を止めた。わたしよりも頭一つ分背が高い。暑がりなのだろうか、ビーチサンダルにハーフパンツ、ポロシャツ。それとも暑いのが好きなのか、肌は日に焼けていて、きっと体を動かすことが好きなんだろう、立派な筋肉が腕にも足にもついていた。首にも。そして首にはゲルマニウムのネックレス。テレビでよく見るやつだ。サングラスをかけていて顔はよく分からぬけれど、やっぱりわたしはこの人を知っているような気がする。

「夏休みは実家に帰るつて約束したじゃないか。忘れちまつたのか？」

まるで子供をあやすかのように。仕方がねえなあ、昔つから離は忘れっぽい性質だったからなあ、つて。太い腕を胸の前で組みながら、ククとおかしさを押さえきれずに笑う、その様は。

「まあ、そこがまたかわいいんだけどな」

そう、わたしは知っている。こういうものを何て言うのか。

「親バカ」

「おう、そうだな」さもそれが褒め言葉であるかのように、男の人は笑顔を浮かべて。「とりあえず、車に乗れ。親父もお前の帰りを待っている」わたしを促す。わたしに太くてじつじつした右手を差し出す。「爺さん、お前と会えるのを楽しみにしてるんだぞ」

爺さん。お爺ちゃん。懐かしい響きだ。離子、よく来たね。今日は美味しい林檎をお隣さんから貰つてね。せつかくだから二人で食べようじゃないか。婆さんや博仁には内緒だぞ。佐恵香さん、坂上さんから貰つた林檎を持ってくれないかね。懐かしい声。きっと今日も、わたしの好きな何かを買って、楽しみに待つてくれるのであるのだろう。

ちゃんと荷物はまとめてあるか。お父さんがわたしに問う。大丈夫。声には出さず、首肯して答えたわたしを見て、大げさに頷き返す。

「なあ、離。あれは俺以上の親バカだからな。甘すぎて溶かされな

「ようこそお嬢さん」

歩き出したわたしの背後で、お父さんが言った。  
猫の姿はいつの間にかなくなっていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0211r/>

---

ひとこと、ふたこと（一人でいること、二人でいること）

2011年2月19日01時25分発行